2025（令和７）年度

外部評価報告書

2025（令和７）年 11 月

熊本学園大学
KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY

目次

1. 外部評価の実施概要

2. 外部評価委員名簿

3. 外部評価委員による評価結果

4. 意見交換会時の主な意見等

5. 総括

1. 外部評価の実施概要

【1】「外部評価シート」の作成

外部評価委員へ「令和 7 年度熊本学園大学外部評価シート」及び関係資料を送付し、「2024（令和 6）年度自己点検・評価報告書」等に基づき、以下の 4 項目について評価をいただいた。

[1]　基準 2　内部質保証

[2]　基準 4　教育課程・学習成果

[3]　基準 5　学生の受け入れ

[4]　その他（大学全般について）

[1]、[2]、[3]については、4 段階（**4** 大変適切である、**3** 概ね適切である、**2** やや適切ではない、**1** 適切ではない）にて評点を付していただくとともに、全 4 項目について意見を聴取した。

【2】 意見交換会の実施

Ⅰ　日　　時：令和 7 年 9 月 17 日(水)　15:00～16:30

Ⅱ　場　　所：熊本学園大学　本館 3 階　特別会議室

Ⅲ　＜会次第＞

1. 開会
2. 学長挨拶
3. 外部評価委員の紹介
4. 大学関係者の紹介
5. 意見交換

評価項目 1：「基準 2　内部質保証」について

評価項目 2：「基準 4　教育課程・学習成果」について

評価項目 3：「基準 5　学生の受け入れ」について

そ の 他　：評価項目以外の自己点検・評価項目及び大学業務全般に関する意見交換

6. 閉会

学長挨拶

＜司会進行＞萩原学長室長

＜外部評価委員出席者＞脇俊也委員、洲上敬介委員、藤本浩明委員、三浦基路委員

＜本学側出席者＞林学長、金副学長、立木副学長、土井副学長、萩原学長室長、西村事務局長

＜陪席＞事務局次長、教学部事務部長、入試広報部部長、教務課長補佐、総務課長、総務課長補佐

【外部評価委員による評価までの経緯】

8 月 8 日（金）：外部評価に関する資料(2024(令和 6)年度自己点検・評価報告書、令和 7 年度熊本学園大学外部評価シート等、意見交換会のご案内）の送付

9 月 3 日（水）：「令和 7 年度熊本学園大学外部評価シート」の提出締切

9 月 17 日（水）：外部評価に関する意見交換会の実施

2. 外部評価委員名簿

令和 7 年 9 月 17 日現在

（順不同・敬称略）

氏名	役職等
江頭　実	菊池市長
脇　俊也	熊本県観光文化部長
洲上　敬介	株式会社肥後銀行執行役員 北熊本ブロック長
藤本　浩明	熊本県立東稜高等学校校長
三浦　基路	九州旅客鉄道株式会社執行役員 熊本支社長

3. 外部評価委員による評価結果

〔1〕基準２　内部質保証について

評点 （平均）	3.0/4.0

＜評価に関する意見等＞

- 自己点検・評価に対して PDCA サイクルが回っており、内部質保証システムが機能している点は評価できる。部局毎の内部質保証に対する認識に差があるという課題については、引き続き差異にかかる検証を行い、各部局で共有、改善が図られることを期待する。
- 自己点検の結果が学部内等で共有されている点は評価できる。さらに、学生や教職員の理解促進を促し、内部質保証システムが全学的に大学の風土として定着することが期待される。
- 内部質保証推進委員会を設置し、全学的な方針、規定を整備、HP で明示するなど、内部質保証に向けた体制整備とその運用は、徐々に根付いてきているものと推察される。その一方で、学部ごとの評価に対する実働と、その実働に対する評価軸・意識に差異があるようで、引き続き、品質向上に努める必要がある。
- 教育の質の保証及び向上に取り組むための方針、規定を定め内部質保証システムを構築しているが、部局毎に内部質保証に対する認識にかなりの差があるように感じた。内部質保証に対する勉強会の設置・開設については早急に実施すべきであると考える。また自己点検であるように各学部・研究科への改善支援についても十分でないように受け取れるため責任箇所等の認識合わせをまずは行い、改善支援を実装させるべきだと思われる。
- 内部質保証推進委員会から学位授与方針と教育課程の編成・実施方針の連関性の定期的な検証、学習成果の適切な評価の実施、学生支援・教育研究等環境の取組等に係る改善の指示したものの、改善取組が未着手となっている項目が多数ある。また各学部・研究科の PDCA サイクルに対する改善支援が十分ではなく、教学マネジメントを着実に遂行するように改善する必要がある。
- IR データの収集・分析を進めている点は有意義な取組である。さらに、各学部・研究科等へのフィードバックを強化することで、改善サイクルの実効性が一層高まると考えられる。
- IR や ICT の活用をさらに推進し、情報を共有することで、学生や教職員にとって日常的に意識できる内部質保証の仕組みへと発展できるのではと考える。

〔2〕基準４　教育課程・学習成果について

評点 （平均）	3.2/4.0

＜評価に関する意見等＞

- 成績評価については透明性が高く、厳格に実施されていると感じた。成績の問い合わせ制度も設けられている点も評価したい。
- 理念である『建学の精神』や３つのポリシー（ディプロマ・カリキュラム・アドミッションポリシー）など学内外に多く公表されている。また教育課程の順次性や体系性を確認できるカリキュラムマップやツリーを整備し、学位に適した教育課程を体系的に編成している。
- カリキュラムの順次性・体系性を示すカリキュラムツリー・マップを示し、各学位に相応しい授業科目を開設され、教育課程を体系的に編成されていることは非常に素晴らしいと思考する。
- 教育課程の編成・実施方針に則して、十分な教育課程を編成するとともに、効果的な教育を行うための措置として各学科がアンケートを実施して活用している。アンケートの役割が非常に重要であると考えられるため、設問が適切であるか、アンケート分析が適正であるかを十分議論することが必要であると思われる。
- 授業評価アンケート、卒業時アンケート、アセスメントテストなど、複数の評価手法を組み合わせて学習成果を把握している点は有効である。さらにアンケート結果を分析し授業改善のためのFD活動等により教育の質を高めていることは評価できる。
- 多数のアンケートを実施して学習成果を把握しようとしている点は評価できるが、集計データや分析結果を全学的な活用によりつなげてほしい。
- 学習意欲と学力の向上、双方を実現するため、事前・事後学習時間の明示やアンケート調査の実施、履修単位の上限設定等、運用による担保が図られている。
- 概ね適正だと思われる。学修成果や教育課程の適切性の把握のため多数のアンケートを実施されている点は評価できる。しかし、昨年同様にアンケートのデータや分析結果の活用ができておらず、改善を期待したい。
- 社会人等の多様な学生の効果的な教育として、遠隔授業の検討・実施等を行っている点は評価できる。

〔3〕基準５ 学生の受け入れについて

評点 （平均）	3.2/4.0

＜評価に関する意見等＞

- 従来型の選抜入試に加えて、学力以外に学ぶ意欲や熱意等を測る選抜制度を導入する等、多面的・総合的に評価できる取り組みを実践しており、評価したい。また学生受け入れの適切性の点検・評価も委員会で行っており、PDCA が機能していると感じた。
- 学部入試において多様な選抜方式を整え、少子化の中でも安定して学生を集めている点は顕著であり、大変評価できる。今後も入試制度の改善と広報活動を充実され、魅力発信に努めてほしい。
- 課題としても認識している通り大学院において収容人数に対する在籍学生数比率が低い状態である。受験生を増やすことでの全体的な母数の確保が必要であると考える。そのためには遠隔授業等の柔軟な学習スタイル導入、進学を検討しやすい学部・修士課程プログラムの導入等の検討を早急に進める必要があると思われる。
- 昨今の熊本県内の情勢を鑑み、グローバル化の推進、SNS 等を積極的に活用した広報やブランディングの強化及び高校との連携等の受け入れ活動に加え、地元企業等との産学連携等も行う事でさらなる受験生の裾野拡大を図れると考える。
- 障がいのある学生に対し、入学前に入学後の合理的配慮や支援内容を説明している点は、安心して進学を判断できる仕組みとして大変評価できる。継続的な支援の充実を望む。
- 入試から初年次教育（学習支援など）まで一貫して取り組まれている点は高く評価できる。今後は、受け入れから卒業までの到達度との接続をより可視化することが期待される。
- 半導体産業の拠点として TSMC が熊本に進出し、地域社会の国際化が進んでいる。こうした環境の変化を踏まえ、入学者受け入れにおいても戦略的にグローバル化を進め、留学生や外国人志願者への発信を強化すれば、大学の特色が一層鮮明になると期待される。
- 少子化が進み、学生確保が難しい中、多様な入試制度の導入・活用など、一定の努力がなされていることが伺えた。
- 経済・商学分野への進学については、本県における大きな受け皿の一つとして、学生の確保がしっかりなされていることを改めて認識した。

〔4〕その他（大学全般について）

- 入試広報や情報公開は丁寧で、受験生・保護者に安心を与えている。「この大学で学ぶことが未来につながる」と実感できる環境が着実に整っており、今後も継続されることを期待している。
- TSMC 進出を追い風に、地元熊本の国際化が一層進んでいる。入学者受け入れ・教育課程・地域連携を貫く戦略的グローバル化を進められれば、地域に根差しつつ世界とつながる大学像がより鮮明になると思われる。
- 留学生と在学生の双方向交流は、異文化理解と多様な学びを育む好機である。貴学の学生と留学生が共に学ぶ機会の充実や協働の場を広げることで、学生の成長と大学の特色化が一段と進むと考える。
- 現代社会は急速に変化しており、大学教育もその時代の変化に対応した教育プログラムを導入していく必要があると考える。特に熊本では TSMC 進出により国内外の半導体関連企業の進出が顕著であり、海外の大学との交流や産学連携も積極的に実施し時代の変化に敏感な高校生や社会人からの注目を高める事ができれば、教育全般において良いサイクルが創出できると考えられる。
- TSMC 等の拡大地域社会の潮流に特化した営業戦略
  - TSMC による半導体関連の地域拡大に即した学部戦略・授業戦略の考察
  - 拡大地域のマーケティングによる外国人を含む学生受入戦略や海外学生受入戦略
  - 熊本学園としての台湾マネーやサプライチェーン・他県民への教育対策
  - DX 化、SDGs、カーボンニュートラル戦略の立案、AI・VR・AR の活用
- 熊本学園の歴史と地の利を生かした経営戦略
  - 補助金を活用した学内多角化戦略、大学発スタートアップ起業支援、大学発地域活性化
  - 金融リテラシー向上に向けた戦略（学生・教職員双方に対する金融リテラシー向上）
  - 学生就職支援の高度化（インターンシップ制度、教職員の就職戦略の共有）
  - 熊本の企業との連携強化（他組織との連携協定政策と組織マネジメント・経営学等）
- 既設のなんでも相談室を担当できる専門的知識を有する職員のさらなる充実を図る等、学生一人一人が安心して学べる環境を整え、地域や社会との連携を深化させることで貴大学の存在価値を高める事ができると考えられる。
- 自己点検・評価報告書の中には、一人称の表現が見られる箇所があった。学部全体の意見と個人の見解が混在しているように読めるため、合意形成や表現の整理が進めば、内部質保証の信頼性はさらに高まると感じる。

4. 意見交換会時の主な意見等

【基準 2】

- 内部質保証推進委員会に、各学部長を加える必要があるのではないか。
  - 学部長は、内部質保証推進委員会から改善指示を「受ける側」である。委員会は改善指示を「出す側」であることが基本原則であるため、指示を出す側、指示を受ける側が同じメンバーにならないよう議論はしている最中である。
- 各部門の内部質保証の向上や考え方にばらつきがあるように感じられた。それぞれが問題意識を持ったコミュニケーションをとって、課題に対しスピード感をもって取り組む必要があるのではないか。
  - 実施レベルとして大学全体、学部部局、個人の 3 つの層で PDCA サイクルを回すのが基本的なシステムであり 1 つの線で動く民間企業とは異なると考える。部局毎の回答をまとめた報告書は修正を一切せずに原文をそのまま記載しており、その中で管轄範囲を超えて記入している箇所もあるがそのまま編集せずに記載している。
  - 課題については改善に取り組んでいる項目もあれば未着手の項目もあるので、一つ一つ改善していきたい。

【基準 4】

- 大学基準協会から学位授与方針に基づいた学習成果の把握と評価方法について改善が求められていることについての状況と改善されていることはあるのか確認したい。
  - 学部ではなく大学院への指摘である。大学院が大学基準協会から、学位授与方針とカリキュラムの編成方針との関連性をきちんと明示した方がよいと指摘を受けているので、取り組んでいる状況である。
- 各部門でアンケートを実施されているが、アンケートに共通項目はあるのか。またアンケートの聞き方ひとつで評価ポイントが変わるのでアンケートに頼ると危険性もある。また、項目についてチェックしているのか。
  - 大学共通の DP があり、DP を軸にアンケートを行っている。もう少し細かく学部学科の DP に即したものを作成しようと試みている。項目については、教授会等で確認している。アンケートは部局毎に作成するので、同じ設問がないように、また学生がアンケート疲れしないように工夫している。

【基準 5】

- 大学院において収容人数に対する在籍学生数比率が低い点が課題である。
  - 大学院の入学者の問題について令和 6 年度に「商学研究科」「経済学研究科」を統合し、「商学・経済学研究科」を開設し大学院の入学者確保に努めている。社会福祉学研究科、国際文化研究科等も大学院の教育プログラムを工夫しながら入学者確保に努めている。
- 社会福祉学部の第二部は、伝統ある二部であり、就職しながら通学できる点が大きな魅力だったが、時代とともにニーズも変化している。存続させた方が良いのか議論すべきではないのか。
  - 第二部はここ数年定員割れしているのが現状である。第二部の役割、社会的な動向を見ながら社会福祉学部の教授会で検討して、大学で改革等を進めて対応していきたい。
- 近年大学受験生の考え方が変化してきており、学力の高い学生達が年内入試で合格を決めたいとの意向が強くなっていると感じている。
  - 入試については年内入試志向が非常に強く、総合型選抜（探求学習評価型、基礎学力・面接型）等様々な入試制度で、年内に学生を確保しながら、年明けの一般入試へとつなげている。
  - 一昨年より高大連携事業として「クマガク地域創生探究コンテスト」を始めており、高校から選ばれるような大学につながる連携を行っている。
- 付属高校からの入学者を増やす試みはしているのか。
  - 学費の減免、付属高校特別の入試制度等も導入している。また毎年、付属高校との懇談会を開催しており、大学としても一定数の学生の受け入れを期待している。懇談会時に校長はじめ進路指導の先生方等に本学を選択肢の一つとして考えてもらうよう伝えている。付属高校との対話は続けていきたい。

【その他】

- 少子化に向けた対策として学園保有の資産運用・形成や経営について
  - 法人全体で中期経営計画を策定しており、現在第 2 次中期経営計画の 5 年目になる。来年度以降の第 3 次中期経営計画の策定を行っているところであり、組織の活性化と財務の安定を大きな柱として考えている。いただいたご意見は、策定の際に生かしていきたい。

5. 総括

本学では、毎年度、本学における教育研究活動と管理運営等の状況について、部局ごとに、部局自身による点検と評価を行っており、その結果を自己点検・評価報告書としてまとめている。内部質保証推進委員会は、その報告書に基づき、結果を検証し、改善に結びつけることで、本学の教育研究活動と管理運営等の質を継続的に向上させる必要がある。その推進には、自己点検・評価の信頼性と妥当性を高めることが必要不可欠であり、そのために、学外の有識者による評価をいただいている。

今年度は、昨年度より委員が１名交代したが、変わらず５名の委員に、自己点検・評価報告書の評価をお願いした。昨年度は、「基準４　教育課程・学習成果」「基準５　学生の受け入れ」「基準７　学生支援」についてご評価いただいたが、今年度は、本学が常に重視している基準４と基準５は変わらず、「基準７　学生支援」に代わり、「基準２　内部質保証」の評価をお願いした。昨年の「基準７　学生支援」については比較的高い評価をいただいていたため、今年度はそれよりも、内部質保証推進委員会の根幹とも言える「基準２　内部質保証」について、外部委員による評価を受審する必要があると考えた。

実際、教育課程・学習成果、学生の受け入れについてはもちろんだが、内部質保証推進に関して、本学の取り組みを加速させるためのご質問や貴重なご意見を多くいただいた。これから内部質保証推進員会より、各部局に改善指示を行うが、自己点検・評価報告書とともに、今回の外部評価委員から寄せられた貴重なご意見を参考に進めていく予定である。

最後に、ご多忙の中、本学の内部質保証推進にご協力をいただいた外部評価委員の皆様に心より謝意を表する。

2025（令和 7）年度外部評価報告書

2025（令和 7）年 11 月

熊本学園大学内部質保証推進委員会